新しいコレクション

速水御舟《白葡萄と茶碗》

速水御舟（1894-1935）
《白葡萄と茶碗》

1920年
紙本彩色・軸装
38.3×50.0cm
平成29年度購入

速水御舟が細密描写に取り組んでいた時期の静物画を新たに収蔵しました。本作は当館で所蔵する《茶碗と果実》（一九二一年）より数か月前に描かれた作品で、御舟の静物画では初期の部類に分けられます。

一見して、洋画家の岸田劉生が描いた写実的な静物画が想起されることでしょう。壁を背に、画面の約半分を占めるテーブル、中央に丈の高い器、その周囲に果物を配置した構図は、たとえば劉生の《静物（湯呑と茶碗と林檎三つ）》（一九一七年、大阪新美術館建設準備室蔵）あたりに先例が見出せます。《白葡萄と茶碗》のテーブルがわずかに傾いているのも劉生がしばしば行った構成でした。そもそも、御舟はそれまでほとんど静物画を描いてこなかったのですから、静物画に取り組んだこと自体が劉生に触発されてのことだった可能性は十分に考えられます（蛇足ながら、本作の茶碗は御舟夫人によれば河井寛次郎作だったといい、そのことも劉生が友人のバーナード・リーチ作の器を好んでモチーフにしたことを想起させます）。

しかし、ここで重要なのは、御舟が劉生の静物画に触発されたにせよ、本作が劉生の作品とは明らかに異なるベクトルを指している点です。

茶碗に注目してください。遠目にはほとんど気付きませんが、茶碗の内側や外側には、きわめて細い臙脂（えんじ）色の線で、釉（うわぐすり）に生じた微細な貫入（かんにゅう）が緻密に描き込まれています。御舟はここで、対象に近づけば近づくだけ見えてくる細部に執着し、克明に描き尽くそうとしているのです。それに対し、劉生の作品は、全体としては迫真的に見えるものの、細部に眼を凝らすとリアルだった描写が絵具の材質感やタッチに分解され、それぞれの要素として認識されてしまう構造です。こうした違いは、日本画と洋画の材質の違いという次元の問題でもなければ、表現の習熟度の問題でもありません。御舟と劉生の写実に対する追求のベクトルが、そもそも異なっていたことから生じているのです。

では、葡萄はどうか、と思われるでしょうか？ さほど緻密に見えないこの葡萄は、これに限って言えば技法的習熟度の問題でしょう。数色の絵具を部分的にぼかし重ねた手法は、後の《茶碗と果実》で巴旦杏（はたんきょう）を描いた手法と基本的には変わりません。巴旦杏では、驚嘆すべき技倆を発揮し、ハイライト、陰影、実の表面にふいた白い果粉を描き分けることになりますが、この葡萄では未だ至らず。後には省略されゆく背景が描かれたことと併せ、本作は、静物画のスタイル確立までの御舟の模索を垣間見せてくれます。

（美術課主任研究員　鶴見香織）